

ICMC1999報告

ICMA(International Computer Music Association)が開催するコンピュータ音楽の国際会議ICMC(International Computer Music Conference)に参加した。ICMC99は中国・北京(清華大学)を会場として開催され、筆者は8度目の参加となった。ICMC自体についての解説は、「コンピュータと音楽の世界」(共立出版)等に詳しく紹介してあるので、ここでは世界の新しい傾向などについて、特に音楽セッションを中心に報告する。

1. ICMC1999の概要

ICMC99の会場となったTsinghua Universityのキャンパスは、北京市内の北西部に位置し、隣には北京大学もある広大なものであった。構内には庭園や史跡もあり、観光ツアーの団体も多く見かけた。また、この一帯(中関村)には他にも科学技術理工系の大学等が集まり、「北京の秋葉原」と呼ばれる「電腦街」(家電はなくパソコンのみ)も賑わっていた。



北京の「電腦街」(パソコン関係)



G3Mac似のWindowsPC

例年のICMCでは研究発表セッション内でのパラレルはあるものの、コンサートは聖域として完全に確保され、参加者は全てのコンサート作品を堪能することができた。今回もプログラム上の建前はそうになっていたが、ペーパー会場とコンサート会場との移動距離とタイムスケジュールを考慮すると、マチネコンサートと午前午後のペーパーとは昼食を抜いても両立しない状況であり、参加者は究極の選択を迫られた。

現地デスクで取材した、今回のICMC99の概要を以下に紹介する。

- 参加者 --- 約160名()
- ペーパーセッション 35回
- ポスターセッション 17回

デモセッション 17回

コンサート 13回

(主に海外からの正規登録入場者)

またこの他に、ワークショップ、Great Wallツアーなども開催された。コンサートのうち、中国の舞踊家の振付・出演によるものは市内のシアターで満員の市民を集めて開催され、また中国と日本の伝統楽器をフューチャーしたコンサートも多数の市民の来場で満員となった。



ダンスコンサートのプログラム表紙

2. コンサートセッション

まず今回のICMC99のコンサートセッションについて最初に簡単に紹介しておく、午後の13:00-14:00付近の時間帯にテープ作品を中心とした「マチネコンサート」があり、さらに20:00-22:30付近の時間帯にパフォーマンスを中心としたイブニングコンサートが、それぞれ毎日開催された。2日目の10/22の夕方には日本から招待された佐藤紀夫氏のギターを中心としたマチネコンサートがあり、市内「海淀Cinema Theater」に移動して上記のダンスを中心としたコンサートが行われた以外は、全てTshingha Univ. Auditoriumで行われた。

中国での開催という特殊事情から、今回のICMCコンサートでは、現地での機材調達と海外からの機材持込みなどの問題のために、最近のICMCに多かった、ライブものやインタラクティブものがほとんど応募の段階で消滅しており、結果としてテープ作品と、「テープと生楽器」というような古典的スタイルのComputer Musicが中心となった。事務方スタッフは香港からの助っ人、コンサートは少数のICMAスタッフの孤軍奮闘によってな

んとか切り抜けた、というのが事実であり、コンサートだけに限らないが運営面ではかなり厳しい状況であると感じた。



コンサート会場のAuditorium

また、同様の理由で今回はインスタレーション部門も極端に小規模だった(ようである)。センサやマルチメディアなどの、インタラクティブ作品の創作に関しては、デモの場でビデオ上映、という形態も多く見られ、次回ICMC2000では、これら「1回とばし組」を含めてより多くの作品発表が集まるものと期待される。

3. ペーパーセッション



Tongfung Science & Technology Building

ペーパーセッションは、大学に隣接した関連施設である、Tongfung Science & Technology Buildingの3階の2部屋で行われた。ちなみにこの3階のロビーにはレジストレーションデスクだけでなく、同時に3件のポスターセッションのためのスペース、さらにコーヒーカウンターのある部屋の一角がデモセッション、ということで、コンサート以外の全てがこの1フロアでまかなわれたことになる。

大きい方のペーパー[a]会場には、最近のICMCで一つの王道として継続する楽音合成・信号処理関係(最近では物理モデルが中心)のセッションがほぼ連続して居座り、やや狭いもう一つのペーパー[b]会場には、これ以外のテーマの多種のセッションが交互に入る、というような構成となった。また、二つのペーパーとともに3件のポスターと1件のデモ、つまり最大5件がパラレルで発

表されたために、頻繁に移動する人も目立った。これは毎度の光景である。



ポスター発表中の筆者と東野氏(SFC)

今年はICMC常連と言われる有名人の中にも発表をパスした人がいた代わりに、筆者にはフィンランドからの発表が印象に残った。ちょうど世界で話題沸騰のLinuxもフィンランド産であり、Computer Scienceにユニークな優秀さを誇る同国の今後の動向に注目したい。

4. Sensor, Dance

筆者の発表も、伝統楽器「笙」をインタラクティブComputer Musicに活用するためのセンサ関連であったが、今回のICMCでは同様の「センサを開発した」「センサを活用したダンス」等の発表が相次いだ。マイクロエレクトロニクスと各種センサの普及、さらにパソコンによるソフトセンサによって、もはや電子楽器メーカーから演奏様式まで強制して販売されるインターフェースに拘束される時代ではなくなったのであり、自由さを愛する者は歓迎するであろう。

特に今回は、去年からIRCAMでアナウンスされていた"AtoMIC Pro"の現物の展示とデモがあり、価格まで添えたカタログが配布されていた。i-Cubeに続く、この分野での汎用製品として注目すべき動きであろう。



IRCAMのAtoMIC Pro

また、研究発表とともにデモ発表を行ったデンマークのDIEMでも、両肘と両膝の6関節の曲げセンサ情報をワイヤレスで転送するMIDIセンサを、これまた価格を添えて宣伝する、という体制をとっていた。

センサとは、人間とシステムとの接点として、お仕着せでない、創造性を刺激する大きな可能性を持っているのだ、という思いを強くした。

5. 中国の楽器、そして「新楽器」



今回のICMCで多くの参加者が楽しみにしていた事の一つに、中国四千年の文化と触れる、具体的には中国の伝統音楽・民族楽器などを体験する、というものがあつた。そして、コンサートにおいてはもちろん、研究発表においても、地元シード?という印象もあつたが、このようなテーマの発表やデモが行われた。ただしその内容は、「ヤマハのXG音源で中国伝統楽器のようなサウンドを鳴らすパラメータ設定のノウハウ」といった一般のDTM的なものが多く、筆者としてはやや拍子抜けしたのも事実である。

その一方で、今回のICMC99で「ベストペーパー」(スポンサーから賞金)に選ばれた研究に注目したい。プリンストン大学のDan Trueman氏の"BoSSA" というもので、基本的にはバイオリンの演奏をイメージした楽器の新たな構築であるが、BowとFingerboardは判るものの、その特異的な外見の正体は、正12面体の各面にスピーカを配置したその形状にある。



同氏はこのバージョンに至るまで、7年間もこれだけを研究してきた、と披露しただけあって、その細部に至るこだわりと追求の姿勢は感動的でした。過去のICMCで、巨大な正12面体のフレームの各頂点にスピーカを配置した音響システムの発表があり、筆者などは「コペルニクス以来の欧米の形式主義か」と呆れていたのだが、実はこれも同氏の研究の一端なのだった。センサ情報を音源システムに送って電子的な生成音をPAで再生するだけでは楽器ではない、というこだわりが強く感じられた。



そして、多種のセンサを仕込んだBow部分にもFingerboard部分にも、何度となく改造を加えた努力がしのばれた。音楽と研究への情熱を感じさせられた素晴らしい発表であった。多くの教訓を得つつ、筆者は北京で琵琶(Pipa)を仕入れてみた。今回のコンサートでお披露目となるものである。

6. ICMC2000に向けて

今回のICMC2000はドイツのベルリンで開催される。詳しいことは、ICMC99の開始直前に、既に以下のWebで公開された。

<http://www.icmc2000.org/>

私事になるが、ICMC2000の組織委員会から依頼されて、筆者は「センサとインタラクティブ・パフォーマンス」のテーマで、ICMC公式イベントであるWorkshopのOrganizeを行うことになった。ベルリンの会場では参加者一人1台ずつのMax/MSPの入ったMacintoshG3/G4が並ぶ環境は容易であり、ここに一人ずつ異なったオリジナルMIDIセンサを日本から持ち込み、センサの開発とインタラクティブComputer Musicの創作をその場で体験しよう、という意欲的な試みをベルリンのスタッフと検討しているところである。興味ある方々の参加を期待している。

参考文献

- [1]長嶋洋一. ICMC'92 参加報告. 『bit』(共立出版)、1993年4月.
- [2]長嶋洋一. コンピュータミュージック最前線. 『bit』(共立出版)、1993年12月.
- [3]長嶋洋一. コンピュータ音楽国際会議. 『情報処理』(情報処理学会)、1993年12月.
- [4]長嶋洋一. コンピュータミュージック最前線 ICMC1994. 『bit』(共立出版)、1995年3月.
- [5]長嶋洋一. ICMC1995レポート. 『bit』(共立出版)、1995年12月.
- [6]長嶋洋一. ギリシャに集った世界最先端のコンピュータ音楽. 『bit』(共立出版)、1998年2月.
- [7]長嶋洋一. ICMC1998レポート. 『bit』(共立出版)、1999年4月.
- [8]長嶋洋一. 「コンピュータサウンドの世界」(単行本・CQ出版)、1999年5月.
- [9]長嶋「センサ@コンピュータミュージック」、情報処理学会チュートリアル資料、1999年8月.
- [10]「同時進行的1999北京国際電脳音楽会議私的報告」<http://nagasm.org/ASL/10-03/>